

ハートに薔薇色のときめき

227

5

満天の星の下で

ハートに薔薇色のときめき

## 目 次

ハートに薔薇色のときめき

# 1 危険な笑み ～祥子～

「本川君」

書類に目を落としていた本川祥子は、その声にドキンとし、顔を上げた。

声をかけてきたのは、祥子の直属の上司、石見亮介だ。彼の姿を目にし、祥子の胸がきゅんとする。

「はい」

祥子はいつものように無表情で答えた。まるでときめきなど感じていないようにな……  
「滝野が夕食をと言うんだが……君、行けるかい？」

亮介の誘いに、嬉しさが膨らむ。祥子は即座に「もちろんです」とクールな口調で答えた。  
「やつた！」

亮介の隣にいる滝野錦司（きんじ）が、ぴょんと飛び上がりながら叫ぶ。

仕事に集中しすぎて気づいていなかつたが、滝野は、退社後に三人でご飯を食べようと、亮介に言つていたようだ。

滝野は、祥子と同じく亮介の直属の部下。彼女より一年先輩だ。悪い人ではないのだが、お調子者でかなり騒がしい。彼は亮介に懐いているのだが、亮介のほうは騒がしい彼とふたりきりの食事

など疲れてしまふのだろう、滝野に声をかけられたときは、いつも祥子を誘つてくれる。彼女が酒を飲めないというのも、誘つてもらえる理由のひとつ。亮介も滝野も酒を飲まない。滝野などは外見は酒豪のように見えるのに、体質的に受けつけないということで、一滴も飲めない。亮介は付き合い程度は飲めるようだが、酒が好きではないらしい。

亮介に特別な好意を寄せている祥子としては、こうして誘つてもらえることが嬉しくてならない。滝野からは、仕事でしばしば迷惑をかけられるけれど、夕食のきっかけを作ってくれることだけに関しては、感謝したいくらいだった。

今夜、また亮介と一緒にご飯が食べられる。祥子は心を弾ませながら、残りの仕事に取りかかつた。

「和食があ。俺、もつとパンチのきいたもんが食いたいんっすけど」

チヨキの形の自分の手を見つめながら、滝野が不服そうに言う。何を食べるかでジャンケンをし、祥子が勝つて、今夜は和食ということになつたのだ。

「負けたんだ、素直に諦める。お前の好みに合わせてたら、毎回こつたりしたものばっかりになる」亮介に叱られて、滝野は拗ねたように唇を突き出す。大男のうえに、ごつい顔をした滝野のふくれつ面に笑いが込み上げそうになり、祥子は頸にぐつと力を入れた。

亮介の前で、絶対に笑うわけにはいかない。笑つてしまつたら、彼に気味悪がられてしまう。そんなことになつたら、彼女は生きていけなくなる。

祥子の笑顔は、ひどく薄気味悪いらしく、人様に嫌悪感を与えてしまうのだ。

『祥子ちゃんさ、笑うと顔が怖いよ。みんなも気味が悪いって言つてるし……だから笑わないほう  
がいいよ』

小学生のとき、仲の良かつた子が、打ち明けるようにして教えてくれた真実。そのときのことを  
思い出すたび、祥子の胸はずくずくと痛む。

笑わないほうがいいよと、注意してくれた友達は、祥子のためを思つて言つてくれたのだろう。  
だけど……その真実は、祥子に生半可でないショックを与えた。

それ以来、彼女は笑みを浮かべるのをやめた。表情を変えないようにするのが一番楽だつたから、  
無表情に徹した。娘が笑わなくなつたことに両親は眉をひそめ、もっと笑うようにしろとたびび  
注意してきたが、高校生くらいになると、無表情の祥子に慣れてしまつたらしく、小言を言われる  
こともなくなつた。

ほとんど表情を変えない祥子は、女の子たちから敬遠された。親しい友達もできず寂しくてなら  
なかつたが、気味悪がられるよりもしと、自分を慰めた。

いまの会社に入社して二年目になるが、親しい友人なんて夢のまた夢……それどころか、ひどく  
嫌われてしまつていて。

実際陰口を耳にしてしまつたこともある。笑顔を浮かべない祥子は、はたから見ると、とつつき  
にくく、ひどく怖いようなのだ。

それでも……気味悪がられるよりは……マシ……よね？

ありがたいことに、男性社員たちのほうは、不思議と彼女に話しかけてくれる。彼らは、祥子が

笑おうが笑うまいが、別に構わないらしかつた。この無表情も怖くないらしい。たぶん、亮介と滝  
野のおかげだ。彼らが祥子を普通に受け入れてくれているのを見ているから、あまり怖がらずに話  
しかけてくれるのだろう。

女の子の友達を持つことはもう諦めているが、それでもやつぱり憧れを捨てられずにいた。女子  
社員の中で浮いた存在になり、敬遠されて完全に孤立してしまつていても……

食事は美味しかつた。和食に難色を示していた滝野も、楽しそうに話しながら豪快に食べている。

「滝野、少しさは静かに食べられないのか？ 周りに迷惑だぞ」

「えーっ、俺、迷惑になるほど騒いでないっすよ」

「騒いでない？ 機関銃みたいに言葉を連射してやつが、よく言う」

亮介と滝野の愉快なやりとりを眺めながら、祥子は小さく微笑んだ。

その瞬間、亮介が祥子のほうを向いたので、彼女は反射的に笑みを消す。

亮介が、やわらかに微笑みかけてきた。

その笑みにハートを射抜かれ、祥子の息が止まる。

亮介はもつと自分を知るべきだと思う。彼は自分がどんなに破壊的な笑みを浮かべているか、ま  
るでわかつていな。彼は、笑顔が浮かべられない祥子とは真逆で、どんな女性のハートもとろけ  
させるような魅力的な笑みを浮かべる。

笑顔に強烈なコンプレックスを持つているせいで、祥子は魅力的な笑顔の持ち主である亮介に、

どうしようもなく惹かれてしまうのかもしれない。

「石見主任、送つてくださつてありがとうございます」

アパートの前で祥子はお辞儀した。

「なんのなんの、気にすんなよ、本川」

亮介の車の助手席に座つている滝野が、大きな顔をして手を振つてくる。

「僕に言つてゐるのに、なんでお前が応える」

運転席の亮介が、滝野を睨みつけて文句を言う。亮介の言うとおりだと祥子も思うが、滝野は全然気にしていない。

ほんと、滝野さんつてば、困つた人だ。

車で出勤しているのは、亮介だけだ。滝野は車を持つていないし、祥子は免許さえも持つていな。三人で食事に行くとなると、当然のように亮介に乗せてもらうことになる。祥子は、食事のたびに家まで送つてもらうことを申し訳なく思つているのだが、滝野は、これっぽっちも気にしていないうらい。

「本川君、寒いから早く家に入れ。風邪をひくぞ」

確かに、二月に入つたところで、外はひどく冷え込んでいる。けれど、亮介のやさしい心づかいに、寒さも吹つ飛ぶ。

その場では、「はい」と答えた祥子だが、結局、亮介の車が見えなくなるまで見送つた。彼の車

が見えなくなつた途端、寒さが身に染みてくる。祥子は急いで部屋に入つた。

亮介と過ごせて、今日もしあわせだつた。食事も美味しかつたし……

一人暮らしのアパートで、ひとり黙々とご飯を吃るのは寂しい。本当は、毎日、亮介のやさしい笑みを眺めながら食事をしたい。でも、そんな考えは贅沢すぎる。会社の女の子たちは、一度でいいから亮介と一緒に食事をしたいと願つていてるのだから。

彼の微笑みに魅力を感じているのは、祥子だけではない。その証拠に、昨年のバレンタインデーに亮介が受け取つたチョコの数は、三十を超えていた。どのチョコを誰から受け取つたか、書き留めたのは祥子だったのだから、忘れようもない。

たぶん、今年もその役目が回つてくるんだろう。

「はーっ」

思わず大きなため息を漏らすと、祥子は肩を落として淡い桃色のソファに座り込んだ。このソファはついこの間購入した、いまの祥子のお気に入りだ。彼女は可愛いものが大好きなのだ。会社の女子社員が知つたら似合わないと笑うかもしれないけれど……。もしかしたら亮介も祥子に可愛いものは似合わないと思うかもしれない。祥子は再び深いため息を漏らした。

お風呂に入つて温まつた祥子は、急いでベッドに潜り込んだ。

「石見主任、おやすみなさい」

暗い空間に向けてそつと呟く。すでに習慣となつてゐる挨拶だ。

目を閉じれば、優しく微笑んでいる亮介が容易に浮かぶ。

石見主任に、この先もずっと、恋人ができなければいいのに……もし彼に恋人ができるたら、もし結婚してしまつたら……

その考えに、身が震えた。

そしたらもう、苦しすぎて、彼の側にいられなくなる。

でも、仕事を辞めるなんてことは、そう簡単にできない。この先もずっと、彼女はひとりきりで生きていかなければならないのだ。

働かなければ生きていけない。いま会社を辞めても、新しい仕事なんてそう簡単に見つかりはないだろう。

そのときは……他の部署に異動願いを出そうか？

柿沼恭弘のことが、頭に思い浮かんだ。柿沼は亮介と同期。彼もまた他の部署の主任をしている。彼は祥子の仕事ぶりを認めてくれているらしく、自分の部署にこないかとしきりに誘ってくる。もちろん、いまはそんなつもり、さらさらないが……

もし、亮介が結婚……いや、恋人ができるたら……柿沼に頼めば、彼の部署に異動させてもらえるかもしれない。

未来への不安が、ほんの少しだけ和らいだ。そんな未来など来なければいいと思うけど、一生、亮介が結婚しないなんてことはないだろう。いずれ、彼は誰かと付き合い、そして結婚……胸がつぶれそうに痛み、祥子は思考をストップさせた。

やめよう……わざわざこんな辛いことを考えて苦しがるなんて……不毛だ。  
祥子の頬に涙が零れ落ちた。  
彼女は、指先で涙に触れ、馬鹿な自分を笑った。

## 2 引っ越しの目的 ～亮介～

「石見主任、お疲れさんでした。また明日っす」

助手席から降りた滝野は、夜中だというのに大声を出す。

まったく、こいつほど神経が図太いやつは、そうそういまい。

「少しは声を抑える。近所迷惑だぞ」

「えーっ、俺、そんな大声出してないしい」

心外とばかりにむくれて言い返してくる滝野に、亮介は心が折れた。  
こいつには、何を言つても無駄だ。

「それじゃな」

「はーい。主任、気をつけて」

無邪気に大きく手を振られ、亮介は半笑いで手を振り返すと、すぐに車を出した。

確かに滝野に難点はあるが、それでも充分亮介の役に立ってくれているのだ。不本意だが、奴に

は感謝すべきだろう。滝野がいるからこそ、祥子を自然に誘えるのだし、彼女も気軽に誘いに応じてくれるのだ。

運転しつつ、亮介は笑みを浮かべた。

今日も祥子は美しかった。

自分は特別面食いというわけではないつもりだが……彼女の顔を目にすると、亮介は思わず見入つてしまいそうになる。あんな顔が自分の好みだったのだなと、いまさら思う。

二年前、入社してきた祥子を初めて見た日から、亮介の心は彼女に囚われている。祥子が自分の部署に配属されたと知った瞬間など、危うく飛び上がりそうになつたほどだ。感情のこもらない独特の話し方と、クールな性格。整つた目鼻立ち。目を引くほど長いまつげ。引き締まつたウエストに、すらりと伸びた脚。ほどよくふくらんだ胸。

何もかもが亮介を虜にする。

もちろん亮介は、祥子との距離を詰めたい。だが……彼女の反応を見るに、祥子が彼に対しても上司以上の気持ちを持つていては思えなかつた。

この二年、なんの策も取らなかつたわけではない。さりげないアプローチを何度もしてきた。だが……まるで効果はなかつた。

彼女への好意を伝えようと微笑んで見せたときは、あからさまに引いていたし、ワザと勢いよくぶつかって、抱き締めたときも、哀しいほど華麗にスルーされた。

それでも、嫌われていないとは思う。少なくとも、嫌悪されてはいないとははず。

彼のことを嫌いなら、いくら上司の誘いだからって、こう頻繁に一緒に食事をしてくれたりしないだろう。

頭の中に滝野の顔がひよいつと浮かび、亮介は顔を歪めた。

まさか、あの厚顔無恥な滝野を好きなんてことは……ないよな？

絶対にありえてほしくない想像を、亮介は切つて捨てた。あんな奴に男として負けるなんて、プライドが崩壊する。

むつとした顔で運転している自分に気づき、亮介は気を取り直そと、深呼吸した。注意すべきは滝野などではない。亮介と同期の柿沼。奴のほうだ。

柿沼は祥子に好意を持っているようだ。たぶん、亮介同様に、彼女が入社してきたときから。ことがあるごとに柿沼は祥子の仕事ぶりを褒めるし、自分の部署に来ないかと繰り返し彼女を誘っているらしい。

頭がよく、仕事もできて、見た目もいい。いささか変人ではあるが、そういうおかしなところが不思議とひとを引きつける。それが柿沼という男だった。

車をマンションの駐車場に止め、自分の部屋に向かつているところで携帯が鳴つた。相手を確認し、携帯を耳に当てる。

「亮介、いまどこにいる？」

「まつだ じょうじ

」

きりつとした声の主は、松田修治。亮介の高校時代からの親友で、従妹のめぐみの夫でもある。

「うん？　ああ、なんだ来てたのか？」

亮介の部屋の前で携帯を耳に当てている修治の姿が見えた。

「修治、こっちだ。いま行く」

こちらに振り返り、亮介の姿を確認したらしく、修治が手を上げてきた。

「いまたどころか？」

亮介は駆け寄ると、玄関の鍵を開けながら尋ねた。

「ああ。いいタイミングだったみたいだな」

家に入つて何より先に暖房を入れると、亮介は飲み物を用意するため、キッチンに入った。修

治は居間のソファの、互いの顔が見える位置に腰かけ、すぐに話を切り出してきた。

「頼まれてた物件だが、思ったより早く完成した」

「本當か？」

笑顔を浮かべた亮介は、勇んで聞き返した。

「ああ、入居開始が二週間早まった。亮介、どうする？」

「もちろん、すぐに引っ越すさ」

コーエーを淹れながら、機嫌よく答えた。

修治は不動産屋で、亮介は彼に新しい住まいを探してもらったのだ。

別に、いま住んでいるこの部屋に文句があるわけではなかった。彼が引っ越す目的は、ただひとつ。それは、祥子のご近所さんになること。

亮介の希望にぴったりの物件はすぐに見つかったものの、そのときはまだ建築途中だった。半年以上待たなければならぬと知り、別の物件も探してもらつたが、祥子のアパートに近いところには他にいい物件がなかつた。どうせ引っ越すのなら新築のマンションのほうが居心地もいいし、仕方なく完成を待つことにしたのだ。

「ほんとに最上階で良かったのか？」

「いいさ。高みで暮らすという経験も悪くない」

あの高さからなら、祥子の住むアパートも見えるかもしれない。もちろん、彼女の生活を覗こうなどと不埒なことは考えていないが。

「ここも悪くないと思うんだが……」

コーエーを受け取りながら、修治が言う。

「それにもしても、片付いてるよな。この部屋が男のひとり所帯だなんて、誰も思わないぞ」

まるでけなすように言う。亮介は声に出して笑つた。

「掃除は苦にならないんだな」

「おかしなやつだよな、お前つて。料理はそこのレストランよりうまいときてるし……」

そう言つた修治は、愉快そうに笑い出した。

「めぐみのやつ、お前が越してくるのを手ぐすね引いて待つてゐるぞ。ほんとに、あそこで良かつたのか？」

従妹のめぐみはまるで遠慮のないやつで、亮介のところにやってきては、ご飯を食べさせると横

柄に言う。さらには自分の家の夕食まで作らせたり、ケーキを作らせたり……。

今度引っ越す先に難点があるとすれば、それは修治たちの家が、ここよりもかなり近くなるということ。めぐみには悩まされることになるだろう。だが、祥子を手に入れる可能性が増すのなら、甘んじて受け入れるつもりだ。

「まあ、お前が近くに住むようになれば、ちょくちょく酒も飲めるだろうし、俺は大歓迎だけどな。しかし、うまいな。このコーヒー」

「そうか」

亮介は自分もコーヒーを口にしながら、近づきつつある引っ越しの手順について考え込んだ。

### 3 花丸でしあわせ ～祥子～

「ねえ、もう用意した？」

「用意つて……ああ、チヨコのこと？」

チヨコという単語に思わず反応し、祥子は着替えの手を止めた。

仕事が終わり、更衣室は賑やかな会話で溢れている。彼女の背後で会話しているのは、三人の後輩たちだ。

「決まってるじやん。もう来週だもんね。あちこちの特設売り場を見て回ったんだけど、この間才

ーブンしたばっかのショッピングモール、あそこが一番だつたよ」

「ああ、わたしもあそこに行こうと思つてたんだ」

「ならさ、一緒に行かない？」

「えーっ、わたしたちライバルなのにい」

「ライバルねえ……」

そう言つた後輩は、「あんたさあ」と、ぐつと声を潜めた。

「本気で石見主任にチヨコを渡す気なの？」

「べ、別にいいでしょ」

「聞いたじやん、先輩から。石見主任は、本気のチヨコは受け取らないって」

周囲の騒がしさに書き消されてその言葉は周囲の女子社員たちには届かなかつたようだが、三人のすぐ後ろに立つている祥子には箇抜けだつた。話の内容が亮介のことだつたから、聞くまいとしても耳に入つてしまふのかもしれない。

「あんなの本当かわかんないもん。ライバルを減らそうっていう、先輩たちの策略じやないかと思うんだよね」

「策略ねえ……けど、まあ、あんたじやさ……」

「そそう、遠目に憧れるだけにしといたほうがいいって」

「えーっ、あんたら、それひどくない？」

むつとしたような声のあとに笑い声が上がつた。その後も、きやいきやい言いながらの会話が続く。

三人の楽しげな様子を羨ましく思いながら、祥子は知らずため息をついていた。

亮介は、この社の女子社員の憧れの的だ。そんなひとを相手に、自分が恋心を抱いているなんて、滑稽かもしれない。それでも……好きなものは好きなのだ。好きな気持ちはどんなにあがいたって捨てられないし、彼の側にいることで、さらに好きという気持ちが膨らんでいくのも止められない。

突然、背中にドンという衝撃を食らい、祥子はよろめいた。

「わわっ！」

驚いて振り向くと、楽しそうに会話をしていた後輩たちが、恐れおののくように祥子を見ている。

「も、本川先輩……す、すみませんでした」

このくらいのこと、別にどうということもない。

「いいえ」

なんとも思っていないということを伝えるためにそれだけ言つて顔を前に戻すと、祥子は着替えを再開した。

「ほ、ほ、本当にすみませんでした」

怯えきつた声に祥子は驚き、思わずまた振り返つてしまう。

目が合つた途端、後輩は「ひつ」と悲鳴を上げ、恐怖に顔を引きつらせた。

「別に……何も気にしていないわ」

祥子は自分の気持ちを正しく伝えようと口にした。だが、それすら事態を悪化させただけのようだ。先ほどまでの賑やかな声は途絶え、更衣室の中は、いまや凍りついたように静まり返っている。

またやつてしまつたようだ。自分のせいでも……またみんなに嫌な思いをさせてしまつた。  
そんなつもりなど、まったくないのに……

泣きそうになつた祥子は、ぐつと涙を堪えた。

先に着替えを終えた三人の後輩たちは、逃げるようになっていった。彼女たちがいなくなつても、部屋の空気は元に戻らず、気まずさに押しつぶされそうになりながら着替えを急ぐと、祥子も更衣室から出た。

ドアが閉じた途端、更衣室の中がざわめく。

「ひやーっ、相変わらず怖いわ、クールビューティ本川。更衣室の中が、北極になつたかと思った。この鳥肌見てよ」

楽しげに嘲る声が聞こえた。ドアの外に声が漏れることなど気にしていないらしく、辛辣なコメントはまだ続く。

「ほんと、うつざいよね。男にばっかり取り入っちゃつて。あんな女の敵、さつさと辞めちゃえばいいのに」

彼女は耳を塞ぐようにして、その場から去つた。

「あら、本川さん」

廊下を急いでいた祥子は、急に呼び止められ仕方なく立ち止まつた。

他部署の先輩が三人、立ち話をしていたようだ。

「なんでしょうか？」

声をかけてきた先輩は、祥子をじろじろ見てくる。

「ねえ、あんたさ。また石見さんにくつついてるつもりなわけ？」

くつついて？

確かに、仕事で補助をしているので、仕事中は彼の側にいるし、昼食も滝野も加えた二人で食べるのが日課になつていてから、くつついていると言わればそうだろう……

「そんなに邪魔したいわけ？」

「邪魔……ですか？」

意味がわからず、祥子は問い返した。

「邪魔に決まってるじゃない。チヨコレートを渡そうっていうときに、あんたがぴたりくつづいていたんじや、せつかくのイベントも台無しつてことよ」

バレンタインデーのことを言われているのだと、ようやく気づいた。

「そうでしたか……すみません」

ですが、と続けたいところだったが、祥子は口を閉ざした。

反論しても、いい結果は生まれないだろう。

確かに昨年のバレンタインデー、祥子は亮介にくつづいて歩き、彼に頼まれた仕事をした。受け取ったチヨコの管理とくれた相手のチエックを頼まれたのだ。もちろん仕事ではないが、そこは上司の頼みだし、言われるまま引き受けたのだが……

女子社員たちには、良く思われていなかつたらしい。

よくよく考えてみれば、確かに先輩の言葉も頷ける。もし祥子が亮介にチヨコを渡そうとして、彼の側で名前をチエックしている女性がいたら、心が萎える。

「ほんと、あんたつて最低な女よね。女心なんてまるでわかつてないし」

「あんたたち、わたしに言わせりや、この本川に女心を期待するほうがおかしいっての。もとから感情がないのよ、感情が。なーにがクールビューティ本川よ。笑わせるわ」

「男には人気あるもんねえ。この無表情がたまんないんだつてさ」

「男をはべらせて女王様気分か。さぞかし気持ちがいいんでしょうねえ」

祥子が俯いた、そのときだつた。

「本川先輩っ！ こんなところにいらつしやつたんですかっ！」

急に大声が聞こえ、祥子は後ろを振り返つた。

声をかけてきたのは、顔と名前は知つてはいるものの、親しいと言つほどではない後輩だ。彼女は小走りで駆け寄つてきて、祥子の手首を掴むと、「早く来てくれないと困りますよお。さあ、こつち、こつち」と叫びながら、駆け出す。腕を引っ張られた祥子は、呆気に取られたまま一緒に走つた。角を曲がり、他の部署に連れ込まれる。

「おーっし、園島そのじま、よくやつた」

そこにいたのは柿沼だつた。そして、祥子を引っ張つてきたのは、柿沼の部下である園島都美子とみこ。

「あ、あの……柿沼主任、何か御用でしようか？」

戸惑いながら問いかけた途端、柿沼がずつこける真似をした。隣の園島も付き合ふようにずつこけるふりをする。

「君がこわーい先輩に捕まつて、のつびきならない窮地おぢに陥つていたようだつたから、助けを差し向けたんだが」

「えっ？」

助けてくれたのか？ ふたりして？

喜びよりも、驚きのほうが大きかつた。園島は頬を染め、達成感に満ちた笑顔を浮かべている。「もおつ、勇気ふりしぶりましたよ。あの先輩たち、怖すぎなんすもん。まだ足が震えてます。柿沼主任から、行つてこいつて命じられて、生きた心地がしませんでした」

「よく言う。俺が言う前から、助けたがつてたじやないか？」

「そ、それは……だつて、見てられませんよ」

「正義感バリバリだもんな、園島」

「みんな一緒ですよ」

「そうかあ？ そうは思えないけどな」

「あ、あの……氣を使つていただきまして、ありがとうございます」

祥子はふたりに向けて頭を下げた。

助けてもらえるなんて……それも、同性の園島に……それが何より嬉しかつた。

「本川先輩、やつかまれてるんですよ。あの素敵すぎる石見主任の側にいられるから」

「素敵すぎ……か？」

「いま、鼻で笑いましたね？」

園島は柿沼の言葉にむきになつて言い返す。

「そこで睨むな」

「別に睨んでなんか……」

顔を赤らめて拗ねうねている園島を、祥子は憧れの目で見つめた。

本当に、可愛いひとだ。長いまつげはくるんとカールし、大きな目が愛らしい。感情のままにくるぐると変わる表情、そしてチャーミングな笑顔。祥子がこうありたいと願う女性像だ。あまりに完璧で嫉妬する気にもならない。

祥子の部署の男性社員の中にも、彼女に好意を寄せている者は多い。

「それで？ 本川君、そろそろ部署異動する気になつてないか？」

「なるわけないですよ。あんな素敵な上司の下で働けてるのに、柿沼主任みたいな、部下をこき使つひどいいる職場になんて……」

「こいつ、言つたな」

「真実ですからね。いくらでも言いますよつ」

柿沼と園島ときたら、掴み合い、揉み合いながら互いをけなし始めた。

ふたりの愉快すぎるやりとりに、祥子は無意識にくつと笑つた。

掴み合つていたふたりが、音を立てる勢いで振り返る。ぎょつとした祥子は、笑いを引っ込めて

ふたりと見つめ合つた。

「見たか？」

「み、見ました……」

それは囁くようなやりとりで、祥子には聞こえなかつた。

「あの……？ どうかしました？」

自分が笑つたことに気づかない祥子は、いつもの無表情でふたりに問いかけたのだつた。

自分のアパートの部屋で夕食を終えた祥子は、箸を置いてため息をついた。

今日は色々あつた。更衣室での出来事。そして廊下で先輩たちに言われた言葉……。言葉はきつかつたが、あ言言われても仕方がないと思う。だから、恨む気持ちも湧かない。

それでも、あの場から救い出してくれた園島と、その指示を出してくれた柿沼には感謝とともに、嬉しさが込み上げる。

特に、同性の園島。あれほど好意的に接してくれた女性など、これまでひとりもいなかつた。

あのあと柿沼に誘われ、祥子たち三人は喫茶店でお茶をした。

園島と友達になれたなどと、おこがましいことは思っていないが、それでもただの先輩後輩という間柄よりは親しくなれたのではないだろうか？

バレンタインデーか……

先輩たちの言葉で、昨年の祥子の行動は、亮介に憧れている女子社員たちに嫌な思いをさせてし

まつていてることがわかつた。今年は、頼まれたとしても、断らないと。あの役目は、滝野にしてもらえばいい。だいたい今年は、チョコを渡す彼女たちに、祥子も交ざるつもりでいるのだ。

今年は、絶対にチョコを手渡す。そして、キヤンディーボックスを手に入れるのだ。

「そう、キヤンディーボックス……」

無意識のうちにその言葉が唇から零れ出たことに、祥子は苦笑いした。

昨年、祥子は亮介にチョコを用意しなかつた。バレンタインデーという行事そのものに、当日になるまで気づかなかつたのだ。

山ほどのチョコを受け取っている亮介を、どんな気持ちで見守つたか……

ただ、亮介は、チョコを差し出す全員に、「これは義理だね？」と問い合わせ、そうだという答えをもらつてからしか受け取らなかつた。

どう見ても、本命としか思えないチョコを差し出している子たちも、あの魅力的な笑みで問いかげられ、顔を強張らせながらも「そうです」と答えていた。

亮介に恋人ができるなかつたことにほつとしたが、ひと月後のホワイトデー、祥子は泣くほど後悔する羽目になつた。

その日、亮介は大きな紙袋をふたつ提げて出社してきた。その中には、なんとバレンタインデーにチョコをくれた子たちに渡す、キヤンディーボックスが詰まつていたのだ。もちろん、亮介にチョコをあげなかつた祥子に、そのキヤンディーボックスをもらう権利はない。なのに祥子は、キンディーボックスを配りに行く亮介に、付き添わねばならなかつたのだ。

嬉々としてキャンディーボックスを受け取る女の子たちを眺める喜行。それから数日、祥子はがつかりしすぎて魂が抜けたようになつた。

だが、今年は違う！

祥子はぐつと手を握りしめ、心の中で宣言した。

絶対にチョコを渡し、キャンディーボックスをゲットするのだ。

祥子は勢いのまま立ち上がり、壁に貼ったカレンダーに歩み寄つた。そして、十四日に付けた、赤い大きな丸を凝視する。

もうすぐだ！

覚悟を胸に秘めて、ひとり頷く。

今度の週末にはチョコを買いにいかなければ。

亮介だけにチョコを渡すわけには行かないから、滝野にもあげるとしよう。

祥子は眉を寄せて考え込んだ。

滝野にあげるとなると……やはり同じ部署の人たちにも、あげないわけにはいかないだろうか？最大、何人くらい欲しがるだろう？せいぜい五人くらいかしら？

滝野は、昨年もチョコをくれないのかと言つてきたから、今年も欲しがつてくれると思うのだが……

そしたら、滝野さんに感謝チョコという名目で渡し、ついでの感じで、石見主任にもどうぞと渡せばいいわよね？

なんだか思つたよりも、簡単にいきそうだ。

祥子は自分でも気づかないうちに、大きな笑みを浮かべ、カレンダーをめくつた。

三月十四日にもすでに赤い丸がつけてある。祥子は足取り軽く、赤いペンを取つてくると、その赤い丸を花丸にした。

カレンダーの中央の花丸を見つめた祥子の顔は、しあわせ色に光り輝いていた。

「ふうっ」

亮介は大きく息を吐くと、ほつとしつつ周りを見回した。

部屋の中は、いかにも引っ越し直前といった様相を呈している。

新しいマンションへの引っ越しは明日へと迫つた。ずっと引っ越しの準備に追われて過ごしていなが、ようやく明日で終わる。すべて業者に任せてしまえば簡単だったのだが……

この際だし、必要ないものはすべて処分してしまったかつた。それに、気分を一新するために、家具も、すべてではないが、新しい住居に馴染むものに買い替えることにした。

しかし、自分ひとりが住んでいただけなのに、あれこれと物が増えているのには驚いた。引っ越し先で、また荷物の片付けをすると思うとうんざりするが……そちらはそう慌てることも

#### 4 まずは催促 ～亮介～

ない。ゆつくりやればいいだろう。

近所に、亮介が越してきたとわかつたら、彼女はどう感じるだろう？  
いつもと同じ、無表情な祥子の顔が脳裏に浮かぶ。

嬉しそうにはにかんでいる顔を、なんとか想像してみようとしたが、無理だつた。  
これは自分の想像力が乏しいせいなのか？

それでも、ほんのりと微笑んでいる顔は思い浮かべられる。この二年の間に、幾度か目にしたこ  
とがあるのだ。

それは、いつもほんの一瞬だつた。顔を逸らす瞬間、祥子はふわりと微笑むことがあるのだ。た  
ぶん、本人が意識しないときだけ現れる笑み。

まったく不思議な子だ。

無表情だから冷たく見えるが、言葉を交わせば、驚くほどの純粹さに触れられる。

けれど、内面には踏み込めない。それは彼女との間に壁を感じるからじやない。ただ、彼女が戸  
惑うからだ。あの戸惑いが、こちらの動きを止める。

なんなんだろうな、あれは？

ともかく、彼女の家の近くに引っ越せば、仕事以外でも親しくなれるチャンスが格段に増えるだ  
ろう。三人で夕食を食べた帰りも、今度は滝野が先、彼女を後で送れることになる。無条件でふた  
りきりになれるのだ。それだけでも引っ越す意味がある。

建設中のマンションには何度も足を運んだが、祥子のアパートのほうには行つていない。彼女と

親しくなりたいという理由で引っ越すことが、バツが悪いのだ。

こんなことでは、近くに引っ越したことを、なかなか告げられないかも知れないな。

亮介は顔をしかめた。

でも、告げないことには、送る順番も変えられないし……

ぐだぐだと悩んでばかりいる自分に嫌気がさし、亮介は立ち上がつた。

もう夜もかなり更けていて。さっさと寝たほうがいい。

寝室に入り、ベッドに潜り込む。このシングルベッドも今夜限りだ。引っ越し先の部屋はかなり

広いので、セミダブルのベッドを購入した。

亮介は、自分が選んだベッドを思い出し、身じろぎした。

健康な男の身体を持つ身だ。祥子を求める気持ちは、膨らんでいくばかり。  
手に入れたい……なんとしても……

翌日は快晴だつた。

引っ越し荷物は手馴れた男たちの手で神業のように素早くトラックに積み込まれ、一時間後には  
真新しいマンションの十階にある部屋に運び込まれていた。

「驚くばかりだな。あつという間に終わつた感じだ」

亮介は笑いながら、引っ越しを手伝つてくれている修治に言つた。  
「何言つてる。これからが本番だぞ」

「まあな」

家具は配置されているものの、どの部屋も雑然としている。

「まずは、キッチンと居間だけ綺麗にするさ。あとは、ぼちぼちやる」

「お前のことだから、五年経つても引っ越しした日のまま、段ボールがあるなんてことはなさそうだな」

「は？ 五年もそのままだなんて……そんな奴いるのか？」

「いるいる。人間色々だぞ」

愉快そうに言つた修治は、急に周囲をきょろきょろと見回した。

「どうかしたのか？」

「いや、ほら、連中はどうしたんだ？」

連中と言われただけで、すぐに誰のことを言つているのかわかつた。そして、わかつてしまつた自分になんとかむしやくしやする。

連中というのは、亮介の大学の後輩である中本哲郎なかもとてつろうと、蓑田昇みのだのぼるのことだ。滝野に似たタイプで騒がしい上に、世話も焼ける。

ふたりとも大学院に進み、いまだ学生の身分。金に困りがちな生活をしているため、食べるのに事欠くと、ふたりして亮介のところにやつてくる。なぜか、必ずふたり一緒なのだ。彼らがひとりで来ることはまずない。さらに、なんの連絡もなく突然やつてくる。おかげで自分のぶんの食事をふたりに取られ、当の亮介は、なんにも食べられなかつたなんて、許しがたいことすらあつた。

さんざん振り回され、疲れさせられ、どうしてこいつらの世話を自分が焼かなきやならないんだと、虚むなしさに囚とらわれる。

「あいつらには引つ越しのこと、知らせてないんだ」

顔を歪ゆがめて言う亮介に修治は吹き出し、声を上げて笑い出した。

「どのみち、ばれるのに」

そんなことはわかっている。見つからないように身を潜めていようと考へてゐるわけでもない。

氣のいい奴らだし、慕つてくれるのは嬉しいのだが……

「ばれるのは、遅ければ遅いほどいい」

「気持ちはわからないでもないが……来ないと来ないで寂しいもんだぞ」

亮介はぷつと吹き出した。

「そなだろうな」

世話が焼ければ焼けるほど、いなくなれば寂しいだろう。それでも……当分は顔を見なくともいい。

「そなだ……めぐみ、遅いな」

妻の名を口にし、修治が腹に手を当てる。

めぐみはいま、食料品の買い出しに行つてゐる。縁起物だし、引っ越し<sup>そば</sup>蕎麦を食べようと言ひ出

し、自ら買い物に出かけた。もちろん、蕎麦を作るのは亮介だが……

「そろそろ帰るだろう。お湯、沸かしとくかな」

亮介は立ち上がり、キッチンに入つた。修治も移動してきて、キッチンの中で動き回る亮介を、

カウンター越しに見ている。

「なあ、亮介」

「うん？」

足元の段ボールから皿を取り出し、食器棚に詰め込みながら返事をする。

「この引っ越し、なんか理由があるんだろ？」

その問いにどきりとし、思わず手が止まつた。

「ずいぶんと焦つてるようだつたから、最初はストーカーにでも悩まされてるのかと思つたりもし  
たんだが、半年待つことにしたところを見ると、そんな緊急性があるわけでもなかつたようだし……」

どうやら、修治は亮介から答えがもらえるとは思つていないらしい。ひとりごぶつぶつ言つてはいる。  
好きな女との仲を進展させたくて、彼女の家の近所に越してきたなんて知つたら……腹を抱えて  
笑うんだろう。

へタに知られたら、笑われるだけでなく、余計なお節介をされそうだ。めぐみは言うに及ばず……  
ふたりに知られないように気をつけないとな。

「ああん、もう、亮ちゃんの作つたものは最高だね！」

蕎麦を完食しためぐみは、満足そうに叫び、お腹を撫でまわす。てんぷらを揚げてトップピングを  
豪華にしたから、蕎麦だけで充分お腹いっぱいになつたようだ。修治もうまそくに食べてくれている。  
亮介はそんなふたりに目を細めた。これだけうまそくに食べてくれると、作り甲斐がある。

「そうそう、実はね、スーパーですつごく素敵な夫婦を見ちゃつたよ」

「素敵な夫婦？」

「うん。年齢はわたしと修ちゃんくらいでさ、奥さんのほうは白い杖を持つてた」

「へーっ」

「なんかすつごいしあわせそうでね。奥さんの笑顔が最高なの。ほんで、旦那さんもかつこよくて  
さ……奥さんのこと、うつまいことカバーしてんのだ」

「お前、そのふたりを眺めて、帰つてくるのが遅くなつたんだな」

修治の指摘は図星だつたらしく、めぐみはにははと笑う。

「しあわせとはいかなるものかを見たね。人生つていなつて思つた」

めぐみと並んで座つてゐる修治が、めぐみの頭のてっぺんをぽんぽんと叩いた。

めぐみは、修治に笑いかけ、きゅっと肩をすばめて見せる。そのめぐみの目は、涙で潤んでいた。

そんなふたりに、亮介は強烈な羨ましさを感じた。思いを共有できる存在が側にいる。どんなに  
か心が満たされるだろう。

「さて、亮ちゃん。来週はいよいよバレンタインデーじゃない。今年もおおいに期待してるわよお」

涙をなんとかひっこめられたらしいめぐみは、目を潤ませたことを誤魔化そうとするように元気

に言う。

バレンタインデーという言葉に、亮介は顔をしかめた。思い出したくもないのに……  
正直、亮介は、バレンタインデーなど消えてなくなればいいと思つてはいる。

チヨコをくれる子の好意は嬉しいし、ありがたく受け取るべきだとは思うのだが……本音を言え  
ば、受け取りたくない。

過去の出来事が思い出され、亮介は暗い気分に陥った。  
おちん

三年前のバレンタインデー。あの年も、たくさんの中、チヨコだけのものが多い  
中、チヨコ以外にプレゼントがついているものもいくつかあつた。プレゼントの中にはかなり高額  
のものもあり、亮介はブランド物のネクタイと名刺入れをくれたふたりの子に、もらつたものに見  
合つた品を返した。それが礼儀だと思ったのだ。だが、それが窮地を招いた。

高価なお返しをもらつたふたりとも、亮介は自分の告白に応じてくれたと思い込んだ  
だ。会社から帰ろうとする亮介のところに、ふたりは一緒に来て、彼を責め立てた。もちろんそん  
な気持ちなどなかつた亮介は、正直なところを告げた。

そのあと彼は、かなり長いことふたりから憎まれ続けることになった。いまは、ふたりとも寿退  
社していなくなつたが……

あんなことにならないように、いまの彼は、チヨコ以外はけつして受け取らないし、必ず「義理  
だね」と確認するようになっている。

義理ではないと口にする子からは、もちろん受け取らない。

そのときもらつたブランド物のネクタイと名刺入れは、手にしているのも嫌ですぐさま処分した  
けれど、気持ちの上で尾を引いていて、そのどちらのブランド製品もいまだに買う気にならなかつた。

「亮ちゃん？ ちょっとお、話、聞いてる？」

「あ……ああ、聞いてる」

「いい、あいつらに、いいのを全部持つていかれないように、気をつけよ」

そう言つためぐみは、「あれつ？」と言い、周囲をきょときょと見回す。

「そういえば、あいつら、来てないの？ 絶対、お昼を狙つてくるもんだと思つたのに」  
その言葉を聞いて、亮介は苦笑した。

めぐみの言うあいつらとは、もちろん中本と蓑田のことだ。

「そうか、それでか。買つてきた蕎麦そばの量が多いと思った」

「だって、亮ちゃんのイベント事に、来ないやつらじやないもん」

めぐみは腑ふに落ちないというように、首を捻りながら言う。亮介は、修治と目を合わせて笑つた。

「知らせてないんだってさ。ワザとな」

「へつ？ ああ、そうなんだ」

夫の言葉に、めぐみの顔がパッと華やぐ。

「そうだ、この際さ、あいつらに亮介を探し回らせて楽しもうよ」

「お前な、趣味悪よが……いや、性格悪いぞ」

夫の軽い咎めにも、めぐみはへっちゃらでにやにや笑つて笑つた。

「いいのいいの。あいつらはそんくらいやつたって、どうつてことないって」

「亮介、いいのか？」

修治が苦笑しながら聞いてくる。亮介はどう答えるか決めかね、苦笑いを返した。

「そいじや、今年のチョコは、このわたしが全部もらいただね」

腰に手を当て、めぐみはにつしつしと笑う。

「おいおい、お前ときたら、まつたくどうつくばりだな」

「どうせ亮ちゃんは食べないもん。もらってあげなきや、チョコが可哀想だよ」

夫婦の会話を聞いていた亮介は、昨年のバレンタインデーのことを思い出した。

いつものように、昨年も大量のチョコをもらったが……きっともらえるだろうと思つていたチョ

コはもえなかつた。

あのときのショックを思い出し、亮介は肩を落とした。

本命チョコを期待したわけではない。義理で充分だつた。他の子がくれるのと同じように、祥子からもえれば嬉しかつたのに……。

救いは、彼女が誰にもあげなかつたこと。

どうも、バレンタインデーに男にチョコをあげるという考えが、欠片かけらもなかつたらしい。

バレンタインデーなんてイベント、たぶん祥子にとつて意味がないんだろう。

くれないのかと冗談混じりに催促したら、くれるだろうか？

くれるかもな……

明るい見通しに心が弾み、自然と口元がほころぶ。

「なーにー？ 亮ちゃんつたら、思い出し笑いなんてしちやつてえ」

めぐみの指摘に、亮介は顔が赤らむのを感じた。

「あ、いや……」

「あいつらがあたふたしてゐる顔、想像してゐるんでしよう。ほーらね、修ちゃん。意地が悪いのはわ  
たしだけじゃありませーん」

「意地が悪いとは言つていなくて。俺は、性格が悪いと言つたんだ」

修治は真顔で答える。

「もおつ、修ちゃんつてば、すぐそやつて、ひとの揚げ足取る」  
めぐみは、唇を尖らせて夫をぽかぽか叩く。

「間違つていたから、訂正しただけ。揚げ足なんか取つちやいない」  
「まったく、あーいえ、こーいうんだから」

じゅれあうような夫婦喧嘩を、亮介は笑いながら見守つた。

こんな風に心の通つた相手を手に入れているふたりが、羨うらやましくてならなかつた。

ふたりのように、祥子と心を通い合はせている未来を、自分は手に入れられるだろうか？  
ともかく、まずは……

チョコの催促をしてみるとするか……

うわーっ！

ベルンダに出た祥子は、目に沁みるような青空に、心の中で歎声を上げた。

気持ちよく晴れたものだ。これならば、洗濯物も、干し甲斐があるというものの。

パンパンと音を立てて洗濯物を広げ、ハミングしながら干していく。ひとり暮らしだから、そんなにはない。洗濯かごの中に残っている最後の一枚を取り上げ、祥子は苦笑した。

男物のトランクスだ。二年ほど愛用している。

もちろん、彼女が穿いているわけではない。母親から防犯のために洗濯物の中に混ぜて干せと命じられ、素直に従つているのだ。

確かに、防犯の役に立つている気がするし……

「それにしても、これも古くなつちゃつたわね」

洗濯を繰り返してすっかり色落ちてしまつていて。

新しいのを買おうかしら……

けれど、男物の下着。独身の祥子には、なかなか難しい課題だ。これをレジに持つていくのは、かなり勇気がいる。

勇気を振り絞れたら、買つてくるとしよう。それよりも、今日はバレンタインデーのチョコだ。どこのお店に買ひに行こうか？

あの子たちが話していたショッピングモールに、ちょっと行ってみたくもあるけど……

彼女たちと鉢合わせしたら、いたたまれないし……会社のひとと会う可能性の低いお店がいい。洗濯物を干し終えた祥子は、出かける支度をし、アパートを後にした。

最寄りの駅まで早足で歩いていた祥子は、引っ越しのトラックとすれ違つた。もしかすると、近くに出来たマンションに向かつているのかもしれない。

建築中にかけられていた入居者募集の垂れ幕も目立つていたし、郵便ポストにもチラシが入れられていた。とても素敵なマンションだが、祥子の稼ぎで住めるような家賃ではない。

ああいうところは、新婚さんとか、子どものいる家族とかが住むところだろう。

祥子は、建物の向こうに見える、十階建てのマンションを見上げた。しばらくの間羨望の目を向けてから、再び駅へと歩き出した。

チョコが陳列された特設コーナーを前に、祥子はしばしそのまま立ち竦んだ。

バレンタインデーなど気にしたことがなかつたから、この季節に、こんな風にチョコが売られたことは、知らなかつた。子ども向けみたいなものから、高級感のある大人用のチョコまで、多種多様だ。

考えてみれば、昨年のバレンタインデーに、亮介が受け取っていたチョコも、色々な形状をして

いた。亮介はチョコだけしか受け取らなかつたが、ここにあるチョコには、ハンカチやお酒などがセットになつてゐるものもある。

こういうのが、本命チョコなんだろうか？ そのほかは義理チョコ？

亮介にチョコを差し出したら、きっと他の子と同様に、「義理だね？」と聞かれるのだろう。

その場面を想像してしまい、祥子はくすつと笑つた。

「まあ」

小さな呟きが聞こえ、顔を上げる。目の前に、三十代くらいの女性がいた。祥子と目が合つた途端、その女性は慌てたように視線を逸らす。

祥子は思わず目を瞑つた。たぶん、このひとは祥子の笑つた顔を見たのだ。

嫌な思いをさせてしまつたことに、気まずさと申し訳なさを感じながら、祥子はそそくさとその場から離れた。

滝野たちに渡すチョコはすぐに決まつたが、亮介へのチョコがなかなか決められない。亮介に、滝野たちと同じものは渡したくない。だが、中身が違うことが丸わかりでは駄目だ。外観はまつたく同じに見えるものを選びたい。

眉を寄せ、真剣な顔でチョコを探していた祥子の目に、媚薬という強烈にインパクトのある文字が飛び込んできた。

ハート形のカードに手書きの文字で、『恋の媚薬。一粒食べれば、彼はあなたの虜だよん』と書いてある。

恋の媚薬？

祥子の手は、本人の知らぬ間に伸びていき、そのチョコを掴んでいた。  
高級感溢れるラッピング。義理チョコではありえない値段。

このチョコを食べたら、石見主任はわたしの虜？

現実になるはずないけど……けど……

こ、これにしようかしら……

どうせ渡すなら……

両手でぐつと掴んだまま、腕に提げた売り場専用のカゴに目を落とし、滝野たちに渡すチョコを見つめる。

石見主任のをこれにするのなら、滝野さんたちは、これじゃ駄目だ。主任にあげるものと同じに見えるのを選ばないと……

祥子は、滝野たちのチョコを亮介のチョコとまつたく同じ箱の形のものに替え、包装紙とリボンを買ひ込んだ。

すでに綺麗にラッピングされているものを取り替えるのはもつたいないが、同じものと思つてもらうためには、どうしても包み直さなければならない。

ほんとに、このチョコが媚薬ならいいのに……

『僕の目は……もう君しか映さない。祥子、愛しているよ』

頭の中で、亮介が囁く。

祥子は我を忘れて、相好を崩したまま、次の目的地である男性用下着売り場を目指した。

目的の場所が見えるところまでやつてきたものの、祥子はそこで足が踏み出せなくなつた。ぐつと一歩踏み出そうとするが、身体が進むのを拒む。売り場に誰もいなければなんとかなりそなう気がしたが、残念ながら客の姿がちらほら見えた。

だんだん買おうという気持ちが萎えてきた。

もうしばらく、あの使い古したトランクスを使い続ければいいし、電話で母に頼めば買つておいてくれるだろう。干しておけと、彼女に命じているのは母なのだし。月に一度は実家に帰っているし、そのときにもうつてくれればいい。

自分の考えに納得し、その場を立ち去ろうとした祥子だったが、ふと見ると、いつの間にか売り場にはひとつこひとりいなくなつていた。

レジのところには店員がいるが、何やらしゃがみ込んでごそごそやつている。

なんとなく、祥子のために神様が人払いしてくれたようを感じた。このままこの場を去るのは、悪い気がする。

祥子は思い切つて、男性用下着売り場に駆け込み、誰か来ないうちにと焦りながら売り場を物色した。安いものからブランド物の高いものまで様々だ。あんまり安いやつでは、すぐボロボロになりそうだし、一枚千円くらいのものの中から選ぶことにした。

目立つ色合いのものが、防犯には適しているだろうかと手に取つてみたものの、いつも同じ柄の

下着がぶら下がつていては、防犯のために下げていると見破られてしまいそうだ。

無地のものにしようか？

グレーとか、黒とか、茶色とか……：

祥子は目についた黒のトランクスを手に取つた。

こういうの、石見主任には、穿いててほしいかも……：

実際、亮介がどんな下着を穿いているかなんて知るわけがないし、この先、知ることもないが……：

石見主任が派手な下着を穿いてたりしたら、ちょっと嫌かも……：  
先ほど手にした派手な柄のトランクスに視線を向ける。それを穿いている亮介が頭に浮かび、祥子の口角がゆつくりと上がつていった。

案外いいかも。可愛いかも。

そのとき、ポンツと後ろから肩を叩かれ、祥子は「きやつ」と悲鳴を上げて飛び上がつた。

慌てて後ろを振り返り、仰天する。

「か、柿沼主任」

どうしてこんなところに、このひとが？

「どうして、こんなところに、このひとが？ と、思つたでしょ」

思つたことをそのまま言い当てられ、ドギマギする。

いましがたの、乙女にあるまじき想像の余韻が残つてゐるせいで、すさまじく気まずい。

「ところで、それ、誰に買うの？」

その言葉に、自分が手にしているものに視線を当てた祥子は、動搖のあまりそれを放り投げた。

「おおつと」

柿沼は素早く手を出し、祥子が放り投げたトランクスを受け止めた。

「商品を投げちゃ駄目だな」

「す、すみません」

たしなめられ、祥子は慌てて頭を下げた。

「で？ これは誰の？」

改めて聞かれたが、柿沼に遭遇したショックでいまだ動搖が消えず、口を開けない。

「君のお父さん？ 兄ってことはないよな」

左肘に手を添え、左手のひとさし指で頬を軽く叩きながら独り言のように言っていた柿沼の顔が、祥子に向いた。

「もしかしてえ……」

にやつきながら、意味ありげな声を出す。

祥子は、柿沼が何を言い出すつもりかと、息を詰めて待つた。

「彼氏に……とか？」

「ち、違います」

「ほおっ、となると、つまり君は男物の下着が好きなわけか？ コレクションしてるのか？ まさか、自分で穿いてるのか？」

勝手なことをほざく柿沼の視線が、祥子の身体の微妙な位置に向けられる。

「……もしや、いまも？」

祥子は反射的に柿沼から飛びのいた。

「ち、違います。ちゃんと女性ものの下着を……」

自分が何を口にしているのか気づき、祥子は顔を強張らせる<sup>こわば</sup>と、頬を真っ赤に染めた。

「いい反応だなあ。いやまあ、君をこの店の外で見かけて、似てるよなあとと思ったんだ。けど、今日の君、いつもと見た目が違いすぎてさ。本人なのかすぐには判断がつけられなくて、ずっと追跡してたんだ」

柿沼ときたら、ルンルンってな感じで身体を動かしながら楽しげに言う。あなたは女子高生か、と思わず突っ込みたくなる。

しかし……み、店の外から？

「か、柿沼主任」

「ふむ。やはり、責められる行動か……まあ、責められとくよ。ごめん」

ぺこりと頭を下げる。

やはりこのひとは、ほかのひととはちょっと違う。そう考えている間も、柿沼は祥子を見て、無邪気そうに笑っている。

「謝つて、一件落着したところで……最初の質問だ。この男性物の下着は、誰かへのプレゼントかい？ バレンタインデー用のチョコも、たんまり買い込んだようだし……」

「み、見たんですか？」

チョコを買い込んだところを見られたとわかり、祥子は焦って叫んだ。

「見たさあ」

うろたえている祥子に、柿沼は「あつたりまえだろお～」と明るく付け加える。

「な、なんで見るんですか？ 見ないでください」

見たら犯罪つてもんでもないだろ。それに、追跡した事実は、すでに伝えて謝罪もしたろ」

そんなんふうに無邪気に言わないでほしかった。見られたくないところを見られ、知られたくないことを知られて、気まずくてならないのに。

「俺のもある？」

「えっ？」

「ええーっ。その反応、まさかないのか？」

咎めるように言つた柿沼は、ぶりぶりしながら言葉を続ける。

「こう言つちやなんだけど、俺は君の、ちょっとした恩人だとうねぼれてたんだが……。他のどうでもいい奴等にあげるのに、この俺にはないってのは、ないんじやないか、本川君？」

確かに、恩人といえることをしてもらったし、喫茶店でお茶もご馳走になった。あれ以来、柿沼の部下の園島とは、顔を合わせるたびに、親しく挨拶をさせてもらえてる。柿沼にお礼の意味でチョコをあげるのは当然かもしれない。

柿沼主任にあげるのなら園島さんにもあげたいけど……バレンタインのチョコを、同性にあげる

というのは、常識的にありなかしら？

「おいおい、本川君。俺の存在忘れてないかー？」

目の前で大きな手が振られ、祥子は意識を柿沼に戻した。

「ああ、はい。考え方をしていましたが、もちろん忘れてはおりません。柿沼主任」

ぶつと吹き出され、祥子は眉をひそめた。

「ごめんごめん。改まったく調で返されたから……ついね。で、逸れた話を元に戻してえ……」

「柿沼主任にも、もちろんご用意させていただきます」

「へっ。おおっそうか。本川君、もちろん、本命チョコだろな？」  
「違います」

祥子の即答に、柿沼は唇を尖らせ、ちつちつちつと舌を鳴らしながら顔の前で指を振る。

「本川君、ここはだね、真顔で切り返すところじゃないよ。野暮だろ」

厳めしい顔で諭すように言つた柿沼は、急に表情を柔らげた。そして……

「いやーん、そんなわけないじやないですかあ……ってな感じで、可愛らしくぶりっこしつつ返してくれるところが見たいな。ほら、やつてみて？」

柿沼ときたら、顔を輝かせながら、ほらほらと促してくる。

柿沼の見事な変化ぶりに尊敬の念が湧いたが、もちろん祥子には真似できない。  
「申し訳ありませんが、柿沼主任、そのご要望には、お応えできかねます」

「あ……そ。ならいいや」

柿沼はしょんぼり肩を落として言つたが、すぐに立ち直り、顔を上げると、手にしているトランクスを祥子の前で振つてみせた。

「で、こいつ、買うの？」

「は、はい。あの、ご説明が遅れましたが、この下着は防犯用に購入するんです」「は？」

柿沼のぽかんとした顔に、祥子は笑いを堪えた。

「防犯？ ああ、そうか、納得」

「はい」

「うーん、君は会話のテンポが絶妙だな。実に面白い。やはり、俺の部署に引き抜きたい。園島に加えて、君がいてくれたら、俺は毎日を今以上に楽しめる」「すみません」

「ちえつ。断るテンポまで絶妙だよ」

そう言つた柿沼は、くるりと背を向けてスタッカと歩き出した。手にはトランクスを持ったままだ。「これ、自分じゃ買いづらいだろ？ 俺が買つてきてやるよ」

戸惑つていると、歩きながら柿沼が言つた。

柿沼はレジでお金を払い、祥子のところに戻つてきた。お金と引き換えにトランクスを受け取り、ふたりはその場で別れた。

柿沼と園島に渡すチヨコを買うために特設コーナーに戻りながら、祥子は柿沼のおかしな発言の

数々を思い返しては、吹き出していた。

## 6 安心できない状況 ～亮介～

「よお、石見」

書類を手に廊下を歩いていた亮介は、その呼びかけに足を止めて振り返つた。

「柿沼か。なんだ？」

「なんだよ、なんだか、ご機嫌斜めじゃないか？ 微笑みの貴公子が、不機嫌そうに眉を寄せてち

や、駄目じゃないか」

柿沼は、いつものようににやにや笑いながら、からかつてくる。

「用がないなら、行くぞ」

踵<sup>きびす</sup>を返して歩き出そうとした亮介の腕を、柿沼ががしつと掴む。

「だいつきらいな日が明日と迫り、苛立つ気持ちもわからんじやない。だがな、明日はちょいとここれまでとは違うぞ。この柿沼様には見えるんだ」

柿沼は、腰に手を当て、えっへんと言わんばかりに胸を張る。

こんなやつに構つていられるほど、亮介は暇じやない。だいたい、いまは仕事中だ。

立ち読みサンプルは  
ここまで